



大地の上に生きている

杉谷 淨

原始の日本列島は、現在よりもアジア大陸に近い位置にありましたが、約二千万年前にプレートとの沈み込みによって太平洋側に引つ張られ、日本海が広がっていききました。この時、向きが異なる南海トラフと日本海溝にそれぞれ引き込まれたため、日本列島は中央部から真つ二



- オレンジ色 : フォッサマグナ
- 左側の青線 : 糸魚川静岡構造線
- 赤線 : 中央構造線



つに折れてしまいました。これにより、数百万年の間、日本海と太平洋は繋がっていたのです。しかし、その後、フィリピン海プレートが伊豆半島を伴って日本列島に接近したため、間にあった海が徐々に隆起し、日本列島は再び繋がりました。この間海であったところがフォッサマグナで、裂けた跡が糸魚川静岡構造線と中央構造線です。また、圧縮の際にできた断層にマグマが流れこんだことで、新潟焼山、妙高山、草津白根山、浅間山、八ヶ岳、富士山、箱根山などの火山が列をなしました。地球上にある十四〜十五枚のプレートの内、四枚が重なっている上に日本という国があるのです。

私たちの先祖である新人類が誕生した二十万年前より遙か以前から、この大地は動き続けていました。その移動する大地の上で私たちは生きてきたのです。十一年前に起きた東日本大震

災によって、私たちは地球の大きな力の前ではいかに無力な存在であるのかを思い知らされました。そのような私たち人類が、この大地の主でもあるかのように振舞っていることが、どこか滑稽にさえ思えてきます。私たちの先祖は、この大地を畏怖し祈りをささげてきました。大地は私たちの願いなど意に介しませんから、その祈りは虚しいものでしかないのでしょうか。しかし、謙虚さを忘れてしまうと、大きなしつぱ返しにあうことになるのです。

糸魚川市にある「フォッサマグナミュージアム」には、地殻変動によって作り出された多くのヒスイや、アンモナイト化石などの他に、断層露頭の一部も展示されています。皆様もここで大地の片鱗に触れてみてはいかがでしょうか。



フォッサマグナミュージアム
(新潟県糸魚川市)

己が身にひきくらべて、

殺してはならぬ。

殺さしめてはならぬ。

杉谷伊吹

皆様こんにちは、元氣にお過ごしですか？世間の騒がしさを見ると、今年も色々大変な年になりそうですね。この記事がお手元に届く頃、ロシアによるウクライナ侵攻はどうなっている事でしょうか。画面越しではありますが、多くの命が失われていくのを目の当たりにして、私も色々考えさせられました。

今回タイトルにした「己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」『ブツダの真理のことば・感興のことば』岩波文庫二十八頁）という言葉は、『法句経（ダンマパダ）』にあるブツダの教えです。今回の戦争に関する報道によって、ここに至るまでの背景や両国の複雑な歴史、さらに世界各国の社会体制の違いや利害関係などが分かってくると、問題解決の糸口さえ見えなくなってきました。しかし、両国が互いの主張を繰り返している間も、ウクライナでは侵略行為と戦闘により、多くの人達の身も心も破壊され続けています。この混乱により多くのウクライナの人々が避難を余儀なくされていますが、ロシアからも戦争反対の人々が国外に脱出しているようです。また前線では、一部のロシア兵

たちが厳しい罰則を承知の上で逃亡・離脱しているという話も伝わっています。このような厭戦の動きはウクライナによる情報戦の成果でもあるとは思いますが、それ以上にロシア政府が称える大義を崩壊させるような現実がそこにあるのだと考えられます。その現実とは、戦争という大きな視点からは見えにくいのですが、実際に戦場で起きている「死にたくない・殺したくない」という非常にシンプルなものなのだと思うのです。

正当性や正義感というフィルター越しに相手を見ている間は、目の前の命を奪うことのためにいいのかもしれない。しかしそこにいる「敵」や「悪」と思っている相手が、自分と同じように日々の生活を送っている「只の人間」であると気づいてしまった時に、正義の味方から殺人者という咎を背負う存在になってしまうのです。たとえそれが怒りや不安、恐怖の感情によって始まった正義の戦争であったとしても、その大義によって英雄としての思いが高揚するのは一時であり、その熱が冷めてしまった瞬間から殺人者の自覚を突きつけられることになるのです。以前、寺報に書かせてもらった殺人鬼アングリマラーの話も、善き修行と騙されて人々を殺していたことの罪をブツダによって気づかされてから、ようやく咎に自ら苦しむというものでした。

そうはいっても、自らが生きのびるために、やむを得ず人を殺さざるを得ないという状況も、世の中にはあるのかと思います。しかし、そのような状況下での殺人であったとしても、全く罪の意識を感じることがないということにはならないでしょう。

どれだけその相手が「悪」であったとしても、その人の人生を自分の手で終わらせたという事実には変わりがないのです。その人に思いを寄せる家族や友人からの恨みを買うことにもなりかねません。

ですから、もし何か明確な「敵」がいるとすれば、それは戦争そのものであり、戦場で向かい合っている者同士は、どちらもその戦争の犠牲者なのです。ブツダの教えの如く、目の前の相手を「己が身にひきくらべて」考えて「殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」という思いを胸に、個々が徹底的に戦争を放棄する他に、平和な日々を手に入れる道はないのだと思います。



内灘のハマナス公園に居たカモとカメ

本の紹介

園芸家 12 カ月



カレル・
チャペック著
小松太郎 訳

中公文庫
1988年

新型コロナウイルスの感染が拡大し、ガーデニングをする人が増えたというニュースを耳にして、

ふと本棚から引っ張り出してきた一冊です。作者は、チェコの国民的作家、カレル・チャペック。趣味である園芸のあれこれを一月から十二月に分けてエッセイにした本です。スノードロップ、バラ、ダリア、サボテン、ヒイラギ、杉、芝草など三百種類以上の植物が登場し、ユーモアあふれる文章を画家である兄、ヨゼフの挿絵とともに楽しむことができます。

寒い冬には我が身より木々を心配し、春は土づくりと種まきに心悩ませ、夏は水撒きホースと格闘して、秋には植付けと植替えに精を出す、四季折々の園芸家の生態をコミカルにえがきながら、はつとさせられる言葉も飛び出します。

「同じ植物でも一本一本がみんなちがっている。それから、何を言おうとしていたのだった？ そうだ、

何もいう事はなかったのだ。ただ、生命というものは、想像も及ばぬくらい複雑なものだということ、それだけだ。」（一月の園芸家 二十七頁）

カレル・チャペックは、一九二〇年に発表した戯曲『R. U. R.』で、「労働」を意味するチェコ語「robot」（ロボット）からロボットという言葉を作ったことでも有名です。大学で哲学を学び、ジャーナリストとして、また、作家として活動し、戯曲、SF、紀行、童話（長い長いお医者さんの話）、『ダーシエンカ』他）など、幅広く執筆しました。また、当時の迫りつつある戦況下で、言論と思想で立ち向かい、「ノーベル賞に最も近い人物」とも言われました。

一九一八年、オーストリア・ハンガリー帝国が第一次世界大戦を経て解体し、チェコスロバキア共和国が誕生します。カレルは、新聞記者として、政治的なコラム、評論を盛んに発表し、初代大統領のブレイン的な役割も果たしました。ところが、チェコ民族悲願の独立した民主的国家的平和は長く続きませんでした。一九三三年に隣国ドイツで、ヒットラーが政権を握り、一九三八年にミュンヘン会談で、チェコ東部のズデーテン地方をドイツに併合することをイギリス・フランスに認めてさせてしまいます。（当のチェコスロバキアは、会談に参加していません。）ナチスドイツが台頭する中、ファシズムへの批判をしていたカレルや風刺画を描いていた兄ヨゼフは、周囲から亡命を勧められますが、祖国に留まることを選択しました。そして、一九三八年の十二月、

嵐で荒れはてた庭を修復していたカレルは、肺炎にかかって亡くなります。翌年、ナチスドイツはチェコに侵攻し、兄ヨゼフは強制収容所に送られて死亡したと伝えられています。

私が、この本で繰り返し読むのは、「十一月の園芸家」のページです。冬、葉が枯れて、自然は眠っているように見えるけれども、本当は違うのだと語っています。

「ただ自然は、店をしめて鑑戸をおろしただけなのだ。しかし、その中では、新たに仕入れた商品の荷をほどいて、引き出しにはちきれそうにいっぱいになっている。これこそほんとうの春だ。いまのうちに支度しておかないと、春になっても支度できない。未来はわたしたちの前にあるのではなく、もうここにあるのだ。未来は芽の姿で、わたしたちと一緒にいる。いま、わたしたちと一緒にいないものは、将来もない。芽がわたしたちに見えないのは、土の下にあるからだ。未来がわたしたちに見えないのは、一緒にいるからだ。」（144頁）

このカレル・チャペックの言葉が、多くの人達の心を耕し、ちぢこまった芽を勇気づけ、やがて花を咲かせますように。（登紀子）

*現在、複数の出版社から発行されています。

新装版『園芸家12カ月』（小松太郎訳、中公文庫）

『園芸家の一年』（飯島周訳、平凡社）、

『園芸家の12ヶ月』（栗栖茜訳、海山社）

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約もありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺住職 杉谷淨

五月 鎌倉仏教 5 法然の弟子と浄土宗

六月 鎌倉仏教 6 親鸞と浄土真宗

七月 鎌倉仏教 7 一遍と時宗

今年も新型コロナウイルス感染拡大の為、日程がずれてしまいましたが、今年中には鎌倉仏教史を終わる予定です。法然には百九十人以上の弟子がいました。これほど多くの弟子を持った日本の僧侶が私には知りません。このことが、法然没後、弟子たちがいくつものグループに別れることに繋がります。現在、法然の弟子として最も知られているのは親鸞ですが、当時は親鸞よりはるかに大きな影響力を持った弟子たちが大勢いました。五月はその弟子たちの様子を訪ねてみます。

六月の親鸞に関しては、日本仏教史の次に真宗史を予定しておりますので、そこで詳しく触れることにして、ここでは法然との違いを中心に見てみます。

七月は鎌倉後期に現れた念仏聖の一遍とその教団である時宗についてです。今でこそ小さな教団ですが、当時一遍と一向の広めた踊り念仏は一世を風靡していました。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

徳法寺報恩講案内

六月十二日(日)

今年は例年通り、六月に執行する予定です。新型コロナウイルスの感染状況も落ち着いてくる頃かと思えますので、是非ご参加ください。

午後一時より 正信偈のお勤め

草四句目下「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

午後二時半より 法話 木越祐馨氏

午後三時より 講演 五十嵐ジャンヌ氏

2022年徳法寺報恩講のご案内

開催日 6月12日 日曜日

午後1時より 正信偈のお勤め法話
偈四句目下「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

午後1時半より 法話 光孝寺住職 木越祐馨氏
木越先生は、石川真立図書館の史料編纂室主任を経て、現在輪島門前の真宗大谷派寺院で住職を務めながら、七尾市文化財保護審議会委員、加能地域史研究会代表として活躍なさっています。

午後3時より 講演 五十嵐ジャンヌ氏
東京藝術大学非常勤講師(東京藝術大学、慶應義塾大学、立教大学、実践女子大学、文化学園大学の5大学の非常勤講師)をされています。東京藝術大学美術学部を卒業後、美術の始まりに興味を持ったことから、旧石器時代の洞窟壁画を研究し、昨年までに60ヶ所、のべ140回以上もの洞窟壁画遺跡を訪れていらっしゃいます。今回はフランスの世界遺産であるラスコー洞窟壁画についてお話させていただきます。昨年『なんでも洞窟に壁画を描いたの？美術のはじまりを探る旅(13歳からの考古学)』(新泉社、2021年)を出版されました。

例年通り、今年も社会福祉法人「ひびき」が、お茶・ラメン・蒲團などの販売をいたします。

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>